不退転

第 94 号
東江中学校
校長　神元 勉

人権作文コンテスト①

13日(火)、「第36回全国中学生人権作文コンテスト沖縄大会」の伝達表彰式が、金武中学校で行われ、本校から仲地そら さん（3年2組）と許田美香 さん（3年3組）が、優秀賞に入賞しました。

今回は、仲地そら さんの作品を紹介します。

■ＨＥＬＰを求めて…

小学校に入学した頃、私はある言葉をクラスメイトに言われました。それを言われた私は、心の底から「やめて」という思いが込み上がってきたのを今でも覚えています。皆さんは、そのような経験をしたことがありますか。私には、一回だけあります。それは、「おまえの眉、どうしたわけ?」この一言を言われたときです。

私の右の眉は、2歳の頃にけがをして以来、一部分だけ生えてきません。ただ、眉が生えてこないだけですが、私にとっては小さい頃からのコンプレックスです。そんな私に待っていたのが、男子からの眉に対する、嫌がらせです。

「おまえの眉、なんではげてるの?」「この眉なし」私が気にしていることをズバズバと言ってくるのは、日常茶飯事でした。今、思い返せば、それを言っていた男子は、ただ単にからかっていただけではないかと思います。けがをした理由を知らないだけで、軽い気持ちで言葉を発したのだと思えてきたのです。でも、幼い頃の私は、そんなことを考えていられないほど心が、いっぱいいっぱいでした。私を眉のことでからかった男子達が、とても醜い存在になりました。そして、それと同時に「何でそんなことが平気で言えるの」「なりたくて、なったんじゃないもん」と心の中でドロドロと何かがたまっていく感じがしました。そんな時、ある出来事がありました。それは、小学2年生の時、清掃をしていたときのことです。それまでも、色々と眉に対する嫌がらせしていた男子が、ついにある一言を私に向かって、発したのです。

それは、「おまえの眉、おもしろいや。てか、ほうきばっかしても、眉は生えてこないぜ。」

私の心はいっきに張り裂けました。その男子が言った言葉には、眉をこれ以上なくバカにしているようにさえ感じられたからです。その時の私は、ひたすらと清掃をして受け流そうと必死に努力していました。でも、下を向くと、ポタポタと透明な水滴が落ちてきます。もう、涙をこらえきれず、大泣きした私がいました。さすがに焦ったのか、私に暴言を吐いた男子は、黙り込みました。その時、先生と友だちが駆けつけてくれました。必死に先生に何があったのか訴え続けた私は、泣き止むまで暴言を吐いた男子を憎んでいました。でも、それも先生のある一言によって、心から消え去りました。「そらの眉は、そらにしかない、チャームポイントなんだよ。だから、自信を持ちなさい。」

この一言が、私の今をつくったと言っても過言ではありません。この時、私は初めて、けがをしてよかったと思えました。だから私は、男子が言った「ごめん」という言葉を素直に、受け入れられたのです。もう、私をいじめた男子は、この事を覚えていないと思います。でも、私にとっては忘れられない出来事となりました。私はそれ以来、前髪で隠していた眉も、今では、気にせず、逆に見せることが出来ています。そういう風にポジティブに考えられたことは、先生からの言葉や友達からの助け、周りの気遣いがあったからだと思います。自分一人だけで悩むのではなく、人と苦しみを分かち合うということが、どれだけ大切か、身を以て感じました。

私たちが住む日本では、いじめなどでたくさんの人が苦しんでいます。大きなほくろや傷跡などで、嫌な思いをしている人がいます。そんな人たちに、私はあることを伝えたいです。それは、苦しんだとき、一人で悩むのではなく、一人の人にでもいいから、その思いをはき出してみる事、そしたら、自分が思っていた事、感じていた事に共感して、あなたのこれからの未来が変わるかもしれません。私は、先生に眉のことを「そらの、チャームポイント」を言われたときから、世界が変わりました。だから私は、同じように悩んでいる人たちに教えたいです。

「一人で悩まないで、誰かに話してみて。」そして、悩みを聞く側の私達も、心から聞けるような人でありたいです。そしたら必ず、この世界からいじめは消えて、一人一人の個性であふれる未来が待っています。

私たちにＨＥＬＰを求めてください。明るい未来のために…。